

『大いなる帰滅の物語』第2章1節～3節に見る世界形成の正量部伝承

岡野, 潔

九州大学大学院人文科学研究院哲学部門インド哲学史 : 教授 : インド仏教

<https://doi.org/10.15017/3621>

出版情報 : 哲學年報. 66, pp.1-37, 2007-03-01. 九州大学大学院人文科学研究院
バージョン :
権利関係 :

『大いなる帰滅の物語』 (Mahāsaṃvartanīkathā)

第2章1節～3節に見る世界形成の正量部伝承

岡 野 潔

略号

MSK = Mahāsaṃvartanīkathā (ed. K. OKANO)

Loka-p = Lokapaññatti (ed. E. DENIS)

文献X = 『有為無為決択』 第8章中に引用された書名不明の正量部作品

立世論 = 立世阿毘曇論 (大正 No. 1644)

本論文では第一部において、『大いなる帰滅の物語』(MSK)の第2章第1節～3節の梵文からの翻訳と、文献X(「蔵訳」と記した)のそれに対応する文の翻訳を行う¹⁾。次に第二部において、MSK という正量部の伝承に最も近い記述を有する立世阿毘曇論の²⁾パーリ語への抄訳である『ローカパンニャッティ』の相当箇所(I, 198.7-204.6)の翻訳を行う。

MSKの第2章は、「生成しつつある状態(成劫期)」という題名をもち、成劫の初めから終わりまでを説く。この後にMSKは第3章で住劫の第1劫から第9劫前半までの『純一に幸福な状態』の時期を、第4章で住劫の第9劫後半以降の『安楽と苦しみがある状態』の時期を説く。

本論文で訳される第2章第3節までの部分の後に、3年前の論文で³⁾和訳された第4章第1節までの部分が接続する。第2章第1節から第4章第1節までの内容としての、成劫から住劫第9劫までの出来事を通覧すれば、次の如くである(丸カッコの中にあるのはMSKの詩節の番号)：

[成劫の第1劫] 大梵天の宮殿が出来る(2.1.1) → 大梵天が宮殿に誕生する(2.2.2) → [第1～第10劫] 大梵天は10劫の間瞑想に入る(2.1.3) → [第11劫] 大梵天と同じ世界に他の梵天たちが誕生し、大梵天は創造神と誤解される(2.1.4～6) → 大梵天をとりまく梵天たちの

誕生は1劫の間続く (2.1.7) → **【第12劫】** ブラフマ・カーイカ (梵身天) という梵天たちが誕生する (2.1.8) → **【第13劫】** ブラフマ・プローヒタ (梵輔天) という梵天たちが誕生する (2.1.9) → **【第14劫】** 他化自在天の神々が誕生する (2.1.10) → **【第15劫】** 化樂天の神々が誕生する (2.1.11) → **【第16劫】** トゥシタ天の神々が誕生する (2.1.12) → **【第17劫】** ヤーマ天の神々が誕生する (2.1.13)。

——以上、MSK 第2章第1節『虚空に棲む神々の出現』の節。

【成劫の第18劫】 地上世界の形成はヤーマ天の想起が契機となり、地上を巡遊するヤーマ天の身体から風が発生する (2.2.1～2) → 風輪の形成 (2.2.3) → 水輪の形成 (2.2.4～6) → 地輪の形成 (2.2.7) → 風により地上の地形の形成が開始される (2.2.8) → スメール山の形成 (2.2.9) → 七山や七内海の形成 (2.2.10) → チャクラヴァーラと外海の形成 (2.2.11) → 四大陸の形成 (2.2.12) → 諸山の宝石の形成 (2.2.13) → 大雨により海や池に水が溜まる (2.2.14)。

——以上、MSK 第2章第2節『大地の住所 [の成立]』の節。

【成劫の第18劫続き】 スメール山の細部の形成、山頂に住む三十三天や山腹の四層級に住む四大王天の神々の誕生 (2.3.1～6) → スメール山頂の王都スダルシャナの形成 (2.3.7～12) → ユガンダラ環状山脈にある四大王天の四つの都の形成 (2.3.13) → インドラや四大王天の四王による統治と神々の生活 (2.3.14～21)。

——以上、MSK 第2章第3節『大地の住所 [の成立]』の節。

【成劫の第19～第20劫】 地上に最初の人間たちが生まれた (2.4.1) → ラサーを食べ続けたため、人間たちの体に変化し、空を飛べなくなり、身体の光を失った (2.4.2～3) → 太陽と月が星宿とともに出現した (2.4.4) → その出現をもって成劫の20劫が終了した (2.4.5)。

——以上、MSK 第2章第4節『死すべき者 (人間) の出現』の節。

【住劫の第1～2劫】 ラサーを食する時代が続き、人間の容色に変化が現われた (3.1.1) → 美しく白い者は醜く黒い者を軽蔑し (肌の色による差別の発生)、それが原因でラサーが消滅 (3.1.2) → **【第3～4劫】** パルパタカを食する時代 (3.1.3～4) → **【第5～6劫】** ヴァターラターを食する時代 (3.1.5～6) → **【第7～8劫】** 粉穀などが無い、刈ってもまた生え

る野生の稲が出現(3.1.7)→稲を食べると身体が変化し、男女の違いが出来る(3.1.8)→女性は墮落した者と見なされ、女性差別が始まる(3.1.9)→如意樹衣が生じ、衣服を着始める(3.1.10)→男女の性行為が始まり、人々はそれを非難した(3.1.11～15)→性行為を隠すために家を造る(3.1.16)→人々は初めは食事のたびに野生の稲を取りに行っていたが、やがて競うように稲をまとめて刈っては各自の家に蓄積した(3.1.17～25)→以上で住劫の8劫が経過し、第9劫が到来した(3.1.26)。

——以上、MSK 第3章第1節『食物の出現』の節。

【住劫の第9劫】人間の食欲のため稲が変化し、粃穀をもち、刈ったらもう生えてこない、現在の栽培種の稲が出現した(3.2.1)→人々は過去をふり返り、これまでの行いを反省した(3.2.2～7)→各々がもつ稲田の境界を定めることに決めた(3.2.8)→測量を行い、男に6由旬、女に4由旬の土地を与えた(3.2.9～11)→如意樹衣が消滅し、代わりに綿の木が生じた(3.2.12～13)→盗みという罪が世に出現した(3.2.14～17)→傷害という罪が出現した(3.2.18)→人々は新たな罪の出現を嘆き、相談して、王という地位を作ることを決めた(3.2.19～24)→有徳の一人の人物が選出され、彼との話合いにより、人民は王の力による保護と引き換えに六分の一税を払う約束をし、初代の王が即位した(3.2.25～32)。

——以上、MSK 第3章第2節『生計の手段の開始』の節。

【住劫の第9劫続き】王は即位すると適正に悪人を罰した(3.3.1～2)→王は人々を喜ばせる法話をした(3.3.3～12)→初代の王の統治化においては十不善業道は存在しなかった(3.3.13～16)→王は尊敬され、マハーサンマタと呼ばれた(3.3.17)→王に属する集団はクシャトリアと呼ばれた(3.3.18)→世に所有欲が増大し、十不善業道が世に現われた(3.3.19)→所有を非難して、ある者たちは財を捨てて林に隠遁し、ブラーフマナ(バラモン階級)と呼ばれた(3.3.20)→バラモンたちは自分たちが作ったヴェーダ聖典を学び誦するので、アディアヤカと呼ばれた(3.3.21)→ある者たちは牡牛の振舞いをするので、ヴリシャラ(シュードラ階級)と呼ばれた(3.3.22)→ある者たちは一切の技芸・工芸を行い、ヴィシュ(ヴァイシャ階級)と呼ばれた(3.3.23)→ある者たちは盗賊を処刑し、チャンダーラと呼ばれ、市民社会から放逐された(3.3.24～25)。

——以上、MSK 第3章第3節『階級(ヴァルナ)の分離』の節。

【住劫の第9劫続き】稲は味が劣化した(3.4.1)→豆類などの「副食物」が出現した(3.4.2)→胡麻やその他の穀物は汁に満ちており、砂糖黍も表皮や葉などがなく最高質のものであった(3.4.3~4)→牛たちが出現して、自発的に人に乳をくれ、チャーニングをしなくても生バター等が自然に出来た(3.4.5~6)→象などの乗用獣が出現し、自ら進んで人間に馴れた(3.4.7)→マハーサンマタ王に七宝が出現した(3.4.8)→王の統治により地上のすべての人は幸福であり、十分な食物(資具)と美しい身体(依止)と長い寿命(寿量)を享受した(3.4.9~16)。

——以上、MSK 第3章第4節『様々な食物の出現』の節。

【住劫の第9劫続き】マハーサンマタ王が死に、彼の子や孫たちも死んだが、王統は続いた(4.1.1~2)→人間の悪徳により、自然から得られる食物が減ったので、人々は自分で犁を引いて、耕作を開始した(4.1.3)→牡牛たちが、収穫の分配を条件に、人の代わりに犁を引いた(4.1.4~5)→牡牛を見習って、乗用獣たちも人間に使われるようになり、雌牛も嫌々ながら乳を人間に搾らせた(4.1.6~7)→砂糖黍は葉で覆われるようになり、胡麻などの食用植物は汁を減らした(4.1.8~9)→食が劣悪になったので人間は寿命を減らした(4.1.10)→人間は食欲さにより、牡牛たちに収穫の分け前を与えなかったので、牡牛たちは犁耕をさぼるようになった(4.1.11)→牡牛たちは人間によって鞭打たれ、鼻に紐を通され、言葉も話せなくなり、絶望的に人間に服従するに至った(4.1.12~13)→人間に反抗的になった象や馬たちは手綱で引かれ、鞭打たれ、雌牛たちも堅い紐で縛られて乳を搾られた(4.1.14~15)→砂糖黍が変化して厚い皮により覆われたので、汁を取り出すのが困難になり、また胡麻などもひどく汁がないものになった(4.1.16~17)→食の一層の劣悪化により、人間の身体はさらに劣弱なものとなった(4.1.18)。

——以上、MSK 第4章第1節『[食を] 求め努力することの開始』の節。

- 4 MSK の記述は、小乗仏教上座部正量部の独自の伝統に基づいており、特に興味が引かれるのは、説一切有部など他部派の宇宙論との相違点である。それらについては本論文の注において、【部派的相違点】として指摘した(20箇所ある)。立世論と俱舎論と世記経の、それぞれ所属部派を異にする小乗上座部宇宙論の差異点についてはすでに70年前に小野玄妙(1933)が詳細に解説して

おり、この先学の遺した仕事に心から敬服する。

第一部 MSKと文献Xの翻訳

第2章第1節 虚空に棲む神々の出現

[2.1.1] 世界が形成される時(成劫)、まず初めに生類の棲む場所の上方において、強く輝く創造神(梵天)の宮殿が出現した。それは自ら存在する業の力によって生じ⁴⁾、太陽の円盤のように天空を飾った。

[蔵文§1] また聖正量部の聖典(lung)で次のように[教えは]確立されている。

[蔵文§2] 世界が形成される時(*vivartamāne)、まず初めに梵天の宮殿が輝きから出現した⁵⁾。

【並行資料：L1, 立世論 223c2-12】

[2.1.2] すると、ある一人の生ける者が、アーバースヴァラ天(光音天)の住所から死後に転生し、それ(梵天の宮殿)に入り⁶⁾、業から生じた白浄の身体を有する者として、[宮殿を]飾った。まるで月が白浄の雲を[飾る]如く。

[蔵文§3] その後、アーバースヴァラ天(光音天)から、或る神の子が死後に転生し、自らの業から生じた白浄の身体[を有する]梵天として、[前述の]その梵天の宮殿に誕生した。

【並行資料：L2, 立世論 223c12-14, cf. 世記経 145a6-8】

[2.1.3] 禅定の快樂に満ちあふれた状態を得ながら、彼はそこで10劫の間⁷⁾、専ら瞑想に耽った。[作者の感想:]たとえ無比の栄光(恵まれた状況、富)があったとしても、もし本当に偉大であるならば、どうして[墮落という]悪い変化がありえようか。

〔蔵文 § 4〕 その時、彼は10中間劫の間、禪定に入った。

【並行資料：L3, 立世論 223c14-16】

[2.1.4] その [10劫の] 最期に、独りの者が「ああ、他の生きものたちもいたらよいのに」と、憂いの心をもって考えた時、[その時ちょうど] 誕生を自分の家(宮殿)にもつ⁸⁾ [多くの] 自らの業の力で生じた神々によって囲まれて、[彼は] 輝いた。まるで月が、誕生を自分の家(宿)にもつ [多くの] 自らの業(働き)の力で生じた星座たちによって囲まれて、輝くように。

〔蔵文 § 5〕 そして20劫(訂正:10劫)の終わりに⁹⁾、かの梵天は独り生まれていたので、「ああこの [世界] に他の衆生も生まれていたらよいのに」と考えたが、そう考えた途端、その同じ [世界] に、とても沢山の『梵天の近侍である神々』(梵眷天、梵衆天)が¹⁰⁾、各自の業によって出現した。

【並行資料：L4, 立世論 223c16-19, cf. 世記経 145a8-10】

[2.1.5] [大梵天は] 自分の思考の力によって同時に生まれた彼ら(梵眷天)を見て、「私は創造主である」と [思い]、高位に昇った¹¹⁾。[作者の感想:] 哀れなるかな、無知は。そこでは、偉大な者たちであろうと、偶然の原理が迷妄(愚かな見解)へと導く。

〔蔵文 § 6〕 その時、梵天は自分が思考するや否や出現した彼らを見て、「私がこれらの者たちを生ぜしめた者(創造した者)なのだ」と [思い]、誤った高慢が [彼に] 生じた。

【並行資料：L6, 立世論 223c25-224a1, cf. 世記経 145a11-14】

6

[2.1.6] 初めに生じた者、大神通力をもつ者としての彼を見て¹²⁾、[他の] 神々も彼を創造者として認めた。[作者の感想:] ここには何という奇妙さがあることか。すなわち人々はとても高い敬意をもって、最高者として合意された者に従っている。

『大いなる帰滅の物語』(Mahāsamvartanikathā) 第2章1節～3節に見る世界形成の正量部伝承

〔蔵文§7〕 初めに生じた者、大神通力をもつ者としてのその梵天を見て、また『梵天の近侍である神々』も「この方は私〔たち〕を生じさせたから、私〔たち〕の創造者である」と認めた。

【並行資料：L5, 立世論 223c19-25, cf. 世記経 145a14-17】

[2.1.7] 善い業によって生じた他の多くの梵天宮殿によって、いっそう天空は体に化粧を施した(体を飾った)。まるで〔天空は〕それら(梵天宮殿)の誕生の眺めによって祝祭をなし(好奇心で時を過ごし)ていたかのようにであったが、第11番目の劫がこの〔劫〕後に続いた。

〔蔵文§8〕 その『梵天の近侍である神々』〔の成立〕は、1劫の間続いた¹³⁾。

【並行資料：L7, 立世論 224a1-4】

[2.1.8] 家(宮殿)を有する梵天など〔の神々の世界〕をまるで鏡に写したように、業の力によって、家を有するブラフマ・カーイカの神々(梵身天)が造られた。

〔蔵文§9〕 その〔神々の世界の〕下方に、1劫かかってブラフマ・カーイカの神々(梵身天)が生じた¹⁴⁾。

【並行資料：L8, 立世論 224a4-13 (獨住梵天を梵身天の誤りと見なす)】

[2.1.9] 〔その後〕虚空という鏡の上に、まるでそれら(ブラフマ・カーイカの神々の世界)の鏡像のように生じたブラフマ・プローヒタの神々(梵輔天、梵先行天)の宮殿は、その美を現し出した¹⁵⁾。

〔蔵文§10〕 その後、1劫かかってブラフマ・プローヒタの神々が〔生じた〕。

【並行資料：L9, 立世論 224a13-23】

[2.1.10] まるで日傘によって飾られているかのように、高く位置するカーマ

神（欲界の王マーラ）の住居群によって飾られている¹⁶⁾、ヴァシャヴァルティンの神々（他化自在天）の住居群が、欲界の存在者の業によって生じて、輝いた¹⁷⁾。

〔蔵文 § 11〕 その後、1 劫かかって欲望の場所（欲界）の頂をなす、パラニルミタ・ヴァシャヴァルティンの神々（他化自在天）が [生じた]。

【並行資料：L 10, 立世論 224a23-b4】

〔2.1.11〕 それら（他化自在天の住居群）と競うかのように、自らの業により、ニルマーナ・ラティの神々（化樂天）の住居群がアプサラス（天女）たち [の存在] によって美しく飾られ、出現した¹⁸⁾。

〔蔵文 § 12〕 その後、1 劫かかってニルマーナ・ラティの神々が [生じた]。

【並行資料：L 10, 立世論 224b4-13】

〔2.1.12〕 まるで虚空という海の中に漬けられて生じたかのような、泡の集積に似た、とても美しいトゥシタの神々（兜率天）の住居群が、[自らの] 業の力によって生じて、輝いた¹⁹⁾。

〔蔵文 § 13〕 その後、1 劫かかってトゥシタの神々が [生じた]。

【並行資料：L 10, 立世論 224b13-23】

〔2.1.13〕 さらにヤーマの神々（夜摩天）の住居群は、自らの種子（業）から生じて、まるで蓮の花々のように [その中に] 群がる蜂のような神々や女神たちを有し、虚空という池を飾った。

8

〔蔵文 § 14〕 その後、1 劫かかってヤーマの神々が [生じた]。

【並行資料：L 10, 立世論 224b23-c3】

〔2.1.14〕 こうして、この時六つの天界（六欲天）が、先行するそれぞれ [の世界]

から下へ下へと、一劫ごとに生じて、まるで創造神が「階段を一段ずつ」降りてきて、創造したかのように、「きちんと」分割された梯子の段の「形をもつ六つの」住処が、輝いた²⁰⁾。

〔蔵文 § 15〕 これら全ての「神々の世界」は宮殿をそなえて、各自の業の力によって作り上げられた。

【並行資料：L10】

第2章における、『虚空に棲む神々の出現』という、第1節「おわる」²¹⁾。

第2章第2節 大地の住所【の成立】

[2.2.1] その後、他の生(前世)を想起したヤーマの神々(夜摩天)は、「前世で見た」スメールなどを見ようとする欲求によって、まるで太陽光線のように、「神々の」住居群の下方に「降りて」いった²²⁾。

〔蔵文 § 16〕 その後、ヤーマの神々(夜摩天)は、はるか昔の生の出来事を想起して、はるか昔に見聞したスメールなど「地上の有様」を見ようとする欲求により、自らの宮殿から下方「の領域」へとやって来た。

【並行資料：L11, 立世論 224c3-8】²³⁾

[2.2.2] 『ここに、スメール(妙高山)があった』『ここに、シャクラ(帝釈天)の都があった』『ここに、ユガンドウラ(持双山)があった』²⁴⁾『ここに、海があった』と、「前世の」記憶を伴いながら、彼ら(ヤーマ天)が再び「地上世界に」やって来た時、「ヤーマ天の」身体から風が出現した²⁵⁾。

[2.2.3] 上へ、下へ、周りへその風は吹き、最高に増大するに至った。[作者の感想:] 甚だ強力な者たちがたやすく生まれ出てくるということは、「自ら」偉大な力から生じた者たちから見れば、驚きではない。

〔蔵文 § 17〕 『虚空のこの場所に、スメールはあった』『スメールのこの頂

に、神々の王シャクラの都があった』『ここに、ユガンダラを始めとする七つの山脈があった』『ここに、海があった』『ここに、ジャンプ・ドゥヴィーバ（閻浮堤）が存在していた』と、[前世の] 記憶を伴いながら、あちこちへと逍遙することにより、[ヤーマ天の] 身体（lus）から風が生じて、[風は] 上へ、下へ、周りへと拡がって、最高に増大するに至った。

【並行資料：L 13, 立世論 224c8-13, 225a5-20】

[2.2.4] その後、その[風輪の] 上で、優美な動きをする綺麗な飾りである、稲光りのつる草をもつ、荘重な[雷] 音を轟かせる雲が、全方向に、すさまじく大量の水を放った。[作者の感想:] [その放出の有様は] 最も偉大な人たちの布施の行為に劣らなかった²⁶⁾。

[蔵文 § 18] その時、[風輪の] 上で、尽きざる[雷] 音を轟かし、稲光りの花輪（連続）をもつ、生ける者たちの共通の業（共業）の力で生じた雲から、とても大量の水が落下した。

【並行資料：L 14, 立世論 225a20-22, cf. 世記経 138c15-17】

[2.2.5] [溜まった] 水は底知れないほど深かったが、暴風はそれを包みこみ、[流れ出ないように] 支えた²⁷⁾。[作者の感想:] なぜなら他の者たちを支えようと固く決意した偉大な者たちにとって、あまりに耐えがたいことなど、何も存在しないからだ。

[蔵文 § 19] その時、その風はまた、底知れないほど深いその水の集積を、上下から、周りから包みこみ、支えた²⁸⁾。

【並行資料：L 15, 立世論 225a22-23, cf. 世記経 138c18-19】

[2.2.6] そして、八方に天蓋のように広がったこの水は孔雀の頸のような青色をして、力強く²⁹⁾、輝いた。まるで、着地することでそこに滞在地を得ようと願っている雲たちがいなくなった[青い] 空が、下界にも現われるかのよう³⁰⁾。

【並行資料：L16, 立世論 225a23-25, 224c13-16】

〔蔵文〕 対応文なし。

[2.2.7] 徐々に諸元素が堅実な状態になってきた時、水（水輪）の上で、冷えてゆく煮られた乳〔に出来る乳膜〕と同じような、泥の膜が生じた³¹⁾。内部の輝きをともなって、拡張しながら。

〔蔵文§20〕 その後、徐々に元素が堅実になってきた時、水の上に泥の膜が生じた。煮られた乳の乳膜（クリーム）のごとく。

【並行資料：L17, 立世論 224c16-23】

[2.2.8] すると、カルマ（業）という王〔の命令〕により活動を促された、風という工芸作家は、未だ刻印づけられていない世界を、まるで一度に百本の手を使うかのように液体状のこの泥から創造することにとりかかった。

[2.2.9] 〔世界の〕真ん中に位置し〔周囲に〕海をもつ四角形のスメール山を造るために、〔風は〕吹く。インドラの〔棲む〕山は虚空に向かって頭を上げた。まるで海とともに〔巨大な〕一つのリングを形成せんとするかのよう³²⁾。

[2.2.10] 同様に、〔風は〕自らを七つに分割することによって、はなはだ広く〔世界の表面を〕旋回しながら、〔七つの〕内海（溝状の海）に〔下〕半身が没した³³⁾、ユガンドゥラ（持双山）を始めとする七つの山脈をも創造した。

[2.2.11] 造った物〔の大きさ〕を自ら測ろうとするかのように、〔風は〕下方に位置している世界の円盤の周りを、〔つまり〕へりの地域を旋回することによって、チャクラヴァーラ（輪圍山）とともに³⁴⁾外海を〔世界の外縁に〕沿って造った。

〔蔵文§21〕 それに続いて、その風は、液体状の泥によって覆われた泥濘から、スメールと七つの山脈とチャクラバーラ（輪圍山）と七つの内海（溝状の海）と陸地と〔外〕海などから成る、器世間を造った。

【並行資料：L18, 立世論 224c23-225a5, 225a25】

〔2.2.12〕 最も外側にある一つの内海（溝状の海）から、外海へと行った〔風〕は四維（東北・東南・西南・西北）において〔地を掘って〕両〔海〕を合流させた。〔こうして〕四つの大陸を創造することによって、まるで〔風は〕親切によって四方角がそれぞれ座席を有するようにしたかのようにであった³⁵⁾。

〔蔵文 § 22〕 その後四つの方角において形成がなされ（*parikalpita）、そこで南方にジャンブ・ドゥヴィーパ（閻浮堤）、西方にアパラ・ゴードーニーヤ、北方にウッタラ・クル、東方にプールヴァ・ヴィデーハが〔出来た〕³⁶⁾。

【並行資料：L19, 立世論 225a25-b14】

〔2.2.13〕 大地の泥を本性とした九つの山の王たちは³⁷⁾、次第に、偉大な様々な宝石で出来ている状態となった³⁸⁾。〔作者の感想：〕偉大な気高い精神たちがもたらしてくれる、わけ隔てのない〔世界の〕あり方は、卑しいものを享受する（宝石等を求める）女たちとはかかわりがない³⁹⁾。

〔蔵文 § 23〕 その後、〔泥で出来た大地は〕業の力で生じた風によって徐々に堅固な性質となり、スメールを始めとする九つの山が、様々な宝石から成るものとして、出来た。

【並行資料：L22, 立世論 225b14-16】

〔2.2.14〕 風によって高所低所が〔でこぼこに〕造られたこの〔世界〕を見て、雲たちはまるで、『いかなる悪人もここで〔穴に隠れて存在する〕余地を得ることがないように』と、危惧の念を抱いたかのように、そして一つの親切な行為をしてあげるかのように、海などすべての〔世界中の〕窪みを〔雨〕水をもって覆った⁴⁰⁾。

〔蔵文 § 24〕 大地は泥だけから出来ている⁴¹⁾。その後、〔それは〕高く低い〔で

こぼこの状態] になった。あらゆる「器」(snod 窪み?)の中という中がすべて空になっているからである。[それは] 共通の業(共業)の力で発生した雲から生じたどしゃぶりの雨によって、完全に満たされた。

【並行資料：L23, 立世論 225b16-22, cf. 世記経 139b29-c3】

第2章における、『大地の住所 [の成立]』という、第2節 [おわる]。

第2章第3節 山王に棲む神々の出現

[2.3.1] 高位の山王たちにぐるりと周囲を取り囲まれて、まるで、あらゆる山の最高の王である地位に昇るため、海の王の水を用いて灌頂を受けんとするかのように、半身だけ海の外へ [出して] 立っている [スメール] ——

〔蔵文〕 対応文なし。

[2.3.2] 『この [天空] は、いつも支えを欠いていることから [高さを維持する] 苦勞を生じており、決して [疲れて] 大地に横たわってしまうことがないように』と、考えたかのように、四つの方位に向かって突き出た [四つの] 峰々によって⁴²⁾、遠くまで広がる天空を、上に持ち上げている [スメール] ——

〔蔵文 § 25〕 その後、スメールの頂の四隅に高く身を起こした四つの峰が生じた。

[2.3.3] 『世間より甚だ抜きん出るに至った者にとっては、他の者たちと同じあり方(形)をもつことは不適切である』と、考えたかのように、[山の] 周囲のどの面においても、美しい姿の [神々] にふさわしい住居を得ようとして、四角形になった [スメール] ——

〔蔵文〕 対応文なし。

[2.3.4] 最高ではない業から生まれて山頂に達することが出来ない神々に、居場所 [を与える] ため、[山の] 中ほどにおいて、まるで環状の囲いとよく似た形をとるに至った、4本の皺襞(出張り)を⁴³⁾、ストゥーパ(仏塔)のようにもつ [スメール] ⁴⁴⁾——

[蔵文 § 26] それに続いて、功德が劣っていてスメールの頂に到達できない [神々として] 生じた、四大王天 [の神々] が棲むために、スメールの側面を圍繞するかたちで、四つの『圍繞するもの』('khor mo) [が生じた]。別名『層級』(bang rim = *pariṣaṅḍā) といわれる。

[2.3.5] 『この [世界] は [スメールが] 中央に位置することでどこも沈まなかったし、まさしくそのことにより、世界は自ら高くなった』と、そのように驚愕している [四つの] 方角を、[山の四つの] 側面において、とても強く輝く姿によって照らし出し、歡喜させる [スメール] ——

[蔵文] 対応文なし。

[2.3.6] 花が散り敷き、歩を下せば沈み、歩を上げれば隆起し、また宝石によってカラフルに美しい身体(地面)をもつ [スメール]⁴⁵⁾——、[その頂上に] インドラ神と共なる神々が自らの業の力によって出現すると、彼らはそのスメールを、快樂の園のような山にした。

[以上は] 六つから成る連続詩節である。

[蔵文 § 27] それに続いて、共通の業の力によってスメールの頂にインドラをとまなう神々が生じた。

[2.3.7] おびたしい宝石から形成された環状囲壁が⁴⁶⁾、峰々という妻たちのために [その美しい姿を映す] 鏡になったことで、歡喜の祝いをなす [神の王都スダルシャナ] ——、またそれらに敬礼するために屈み込んだ空を、大門を

そなえた集会場の〔尖塔の〕先端で、引っ搔いて触ろうとするかのように、高くそびえ立った〔スダルシャナ〕——

[2.3.8] 『私自らの姿を除いて、それに〔匹敵する〕いかなる類例を他に求めることができようか』と、あたかもそのように考えているかのような、業の力によって形成された〔スダルシャナ〕——、四種の偉大な宝石から出来た自らの家々によって〔のみ〕相互に〔匹敵する〕類例を求めるということが出来る〔スダルシャナ〕——

[2.3.9] 鳩列(壁の帯状装飾)、獅子耳、アーチ門によって輝いている、数多くの象眼細工の飾りに満ちた〔スダルシャナ〕——、〔都市の空に林立する〕広い旗がまるで〔一箇の〕ターバンを〔形作り、それを頭に〕巻くことで諸都市の王に即位したかのごとくである〔スダルシャナ〕——

[2.3.10] 外では、河や池や園林に生える花から生じた花粉によって、化粧粉をつけた〔かに見える、スダルシャナ〕——、また、内では、欲求と同時に思いのままに出現が起こる財宝によって、最もすばらしい幸福がある〔スダルシャナ〕——

[2.3.11] 無上の様々な種類の宝石が発する輝きによって、闇を打ち破ることに常に努めている〔スダルシャナ〕——、蓮の花が閉じているか開いているかで〔違いが〕見分けられる昼と夜のあいだ、眠ることに目覚めていることにも適している〔スダルシャナ〕⁴⁷⁾——

[2.3.12] 無比の姿から生じる光輝において匹敵しうる他の住所を世界に見出さなかったので、〔神々は〕スメール山にとってまるで王冠のようになった都市、スダルシャナを、自らの王都とした。

〔以上は六つから成る〕連続詩節である。

〔蔵文§28〕 それに続いて、スメールの頂に神々の王シャクラ(インドラ)が棲むスダルシャナ(善見城)という都城が現われる。スダルマー(善法堂)という神の集会場を始めとする、様々な種類の無数の〔建造物〕が現われる。

[2.3.13] 四大王天の神々によって、ユガンドウラ(Yugandhura)などの山々

も歓楽の山となり、四柱の大王たち（四天王）によって〔それぞれ〕内部が飾られている〔ユガンドゥラ山上の〕四つの都市は、都市の中の最も主要なものとなった⁴⁸⁾。

〔蔵文 § 29〕 ユダングラなどの山においても四天王天の神々が住み、ドゥリタ・ラーシュトラ（持国天）などの四王によって内部が飾られた四つの『圍繞するもの』（訂正：都城）が生じた⁴⁹⁾。

[2.3.14] インドラ、ならびに彼以外の首長たち、すなわち、輝かしい指導理念（政治）を飾りとする、峰々の四天王天の神々の中で最も優れた者たち（四王）によって統治された、二種の神々は⁵⁰⁾、さまざまに楽しく時を過ごした。

[2.3.15] 愛する女たちと交わったために、〔集会場に行くのを妨げられ〕束縛された或る男たちは、徐々に女たちをなだめ説得して、神々の王（インドラ）を飾りとする集会場スダルマー（善法堂）に、集会の者たちから許可され、入場した⁵¹⁾。

[2.3.16] 久しぶりにそこ（集会場）から後宮を訪れた他の男たちは、〔ほったらかしにされて〕怒っている女たちをなだめた——『わたしたちの肉体がここにあったばかりではない。心もここにあったのだ。なぜあなたたちは怒るのか』と。

[2.3.17] 耳元にもたせかせせた琵琶を絶えずかき鳴らしつつ⁵²⁾、甘い調子の歌を歌う男たちは、愛神カーマの妻がもつ体の美しさをそなえた、都の最高の美女たちを夢中にさせた。

[2.3.18] 或る者たちは何台かのすばらしい車を宝石で出来た河岸へ走らせ、また思考のように速い何隻かの宝石の船で河に入り、〔競争しあって〕お互いに相手を打ち負かしたことを自慢しあう天女たちと一緒に〔愉快に〕時を過ごした⁵³⁾。

[2.3.19] アショーカ花で編んだ花輪の冠で飾られ、花の蜜によって黄色に〔染まった〕他の者たちは、きわめて美しい女たちとともに、蜜蜂の唸りや郭公の声の響きによって満たされた林の中を、車で遠乗りして、さまよった。

[2.3.20] 長い間、戦争を欲していきりたつ敵ども(アスラ)を、或る者たちはさまざまな英雄的行為によって駆逐して、[帰還し]都に入城する時、歓喜する天女たちによって催された[戦勝の]祝祭を楽しんだ⁵⁴⁾。

[蔵文] 対応文なし。

[2.3.21] 自らの敵どもによって[幸福な状態を]揺るがされることなく、このように遊び戯れるその神々は⁵⁵⁾、第18劫が終りを迎えることを、憂いることもなかった⁵⁶⁾。

[蔵文 § 30] これらすべては1劫によって、すなわち[第]18劫によって、生じた。

[[『生成しつつある状態(成劫期)』という、]第2章における、『山王に棲む神々の出現』という、第3節[おわる]。]

第二部 並行資料の和訳

第一部で翻訳した文献と、内容的にも部派伝承の上でも最も関係が深いのは漢訳の立世論であるから、この第二部で並行資料として真先に挙げるべきは立世論である。しかし立世論についてはすでに OKANO (1998a) において注のかたちで MSK と関連する箇所⁵⁷⁾の独訳を行い、また国訳一切経(論集部1)に渡辺樞雄による書き下し文もあることから、その文をここで挙げることはせずに、むしろ立世論のパーリ語の抄訳である次の文献の翻訳のみを以下に提示することにしたい。

L 犢子正量部の聖典伝承『ローカ・パンニャッティ』(Lokapañatti)
中の成劫の出来事を説く部分 (ed. E. DENIS, I, 198.7-204.6)

L 犢子正量部の聖典伝承『ローカ・パンニャッティ』

L 1 《p. 198, l. 7》世界が形成される時(成劫)が来る。さてこのことは常法であるが、世界が形成される時、ある生ける者は大梵天[の誕生]へ導く働きをする集積した業を有する。その[業は]すでに前世で確定している。物質的存在(色蘊)である四元素(四大)[の結合]により、梵天の宮殿が出現する。[それは]純白で真白であり、綺麗で壮麗できらびやかで美しく、まばゆく輝くものとして存する。その生ける者は、[生まれる]場所の獲得に導く働きをする集積した業を有する。物質的存在(色蘊)である四元素の[結合の]その因とその縁は、業の支配的な力である。このように、因をもち縁をもって、大梵天の住所である宮殿が出現する。これは古からの法である。その梵天のため、広い大きな、光り輝く、きらびやかで壮麗な宮殿が生じる。また梵天のために、梵天界という場所も[生じる]。これが古からの法であり、それは四方角[の広がり]ほどに、そのくらい大きい。[cf. MSK 2.1.1]

L 2 [中陰の状態の]彼はその[場所]に対して執着(纏)を起こす。執着が生じた時、彼は[そこに]誕生する⁵⁸⁾。[cf. MSK 2.1.2]

L 3 彼はそこで10中間劫の間過ごす。歡喜を食べ、歡喜を食として、マナス(意)から成り、自ら[体から]光を放ち、安楽なる状態に住しつつ。[cf. MSK 2.1.3]

L 4 《p. 199》第10中間劫が過ぎ去った時、彼に渴望が生じ、憂いが現れる。「ああ、ここに他の生ける者たちも生まれてくればよいのに」と、この生ける者の心に祈願が起こる。すると或る別の生ける者たちが、寿命が尽きあるいは
18 [前世の]福德が尽きたために、かの[アーバッサラ天(光音天)]から死後転生し、その生ける者(梵天)の友として生まれる。[cf. MSK 2.1.4]

L 5 彼らはそこで独り先に生まれていた彼を見る。彼らはこのように考える。「この方はまさに梵天であり、私たちの創造者、化作者、最高者、発出者、支配者であり、過去と未来に属する[一切の]父である。そして私たちはこの

尊い方、梵天によって創造されたのだ。[そう思う] 理由は何か。この世界にこの方が独り先に生じていたのを私たちは見た。私たちは後からこの世界に生じた」と。[cf. MSK 2.1.6]

L 6 その尊い方も次のように考える。「私は梵天、創造者、化作者、最高者、発出者、支配者であり、過去と未来に属する[一切]の父である。これらの者は私によって創造物として造られた。[そう思う] 理由は何か。先に私の心に『ああ、ここに他の生ける者たちも生まれてくればよいのに』という誓願が起こったが、すると彼らがこの世界に誕生し、私は彼らを見る」。その生ける者(大梵天)はそれらの生ける者と比べて、より長寿であり、より美しい容姿、よりいっそうの偉大さ、より大きな神通力、より大きな威神力をもっている。それらの生ける者たちは、その生ける者(大梵天)と比べて、より短命であり、より劣った容姿、より劣った偉大さ、より劣った神通力、より劣った威神力をもっている。[cf. MSK 2.1.5]

L 7 彼らによって[大梵天の]宮殿はいっぱいになり、[そこは]神々に溢れ、多くの神々を有する⁵⁹⁾。[cf. MSK 2.1.7]

L 8 さてこのことは常法であるが、世界が形成される時、物質的存在(色蘊)である四元素[の結合]より、[多くの]梵天たちの諸宮殿が別々に出現する。[それは]純白で真白であり、綺麗で壮麗できらびやかで美しく、まばゆく輝くものとして存する。それらの生ける者たちは、[生まれる]場所の獲得に導く働きをする集積した業を有する。物質的存在である《p. 200》四元素[の結合]に依ってそれら[の諸宮殿]が出現する。物質的存在の[結合の]自因と縁は、業の支配的な力である。じつにこのように、因をもち縁をもって、梵天たちのその諸宮殿が出現する。これは古からの法である⁶⁰⁾。彼らによってそれら[の諸宮殿]はいっぱいになり、[そこは]神々に溢れ、多くの神々を有する。[cf. MSK 2.1.8]

L 9 さてこのことは常法であるが、世界が形成される時、物質的存在(色蘊)である四元素[の結合]より、ブラフマ・カーイカの神々(梵身天)……ブラフマ・パーリサツジャの神々(梵眷天、梵衆天)……ブラフマ・プローヒタの神々(梵輔天)の諸住処、諸宮殿が出現する⁶¹⁾。[それらは]純白で真白であり、綺麗

で壮麗できらびやかで美しく、まばゆく輝くものとして存する。それらの生ける者たちは、[生まれる] 場所の獲得に導く働きをする集積した業を有する。物質的存在である四元素 [の結合] に依ってそれら [の諸宮殿] が出現する。物質的存在である四元素の [結合の] 自因と縁は、業の支配的な力である。じつにこのように、因をもち縁をもって、ブラフマ・プローヒタの神々 (梵輔天) のそれらの諸住処、諸宮殿が出現する。これは古からの法である。彼らによってそれら [の諸宮殿] はいっぱいになり、[そこは] 神々に溢れ、多くの神々を有する。[cf. MSK 2.1.9]

L10 さてこのことは常法であるが、世界が形成される時、物質的存在 (色蘊) である四元素 [の結合] より、パラニンミタ・ヴァサヴァッティンの神々 (他化自在天) ……ニンマーラ・ラティの神々 (化樂天) ……トウシタの神々 (兜率天) ……ヤーマの神々 (夜摩天) の諸住処、諸宮殿が出現する。[それらは] 金製・銀製・瑠璃製・水晶製であり⁶²⁾、綺麗で壮麗できらびやかで美しく、まばゆく輝くものとして存する。それらの生ける者たちは、[生まれる] 場所の獲得に導く働きをする集積した業を有する。物質的存在である四元素 [の結合] に依ってそれら [の諸宮殿] が出現する。物質的存在である四元素の [結合の] 自因と縁は、業の支配的な力である。じつにこのように、因をもち縁をもって、ヤーマの神々 (夜摩天) のそれらの諸住処、諸宮殿が出現する。これは古からの法である。彼らによってそれら [の諸宮殿] はいっぱいになり、[そこは] 神々に溢れ、多くの神々を有する。[cf. MSK 2.1.10]

20 L11 さてこのことは常法であるが、世界が形成される時、ヤーマの《p. 201》神々 (夜摩天) はこの [地上世界を] 想起する。譬えば、眠っていた人が目覚めて夢を想起するように、あるいは神通力をもつ人が前世の生存を [想起する] ように、まさしくその様に、ヤーマの神々はこの [地上世界を] 想起する。彼らはこう思う。「[かつて] 見た、かの場所に行こう」と。そこでこの [世界] に来て、いくつかのグループに分かれ、この [世界] を逍遙する。[cf. MSK 2.2.1]

L12 『ここに、スメール山王があった』『ここに、スダッサナ (善見城) があった』『[ここに] ナンダ園 (歓喜園) とナンダ池が——チッタラター園 (衆車園)

とチッタカー池が——パールサカ園(龜悪園)とパールサカ池が——ミッサカ園(相雜園)とミッサカ池が——パーリチャッタカ(円生)というコーヴィダーラ樹が——『白毛布』という岩が——スダンマ(善法堂)という神々の集会場があった』。『ここに、大海の内側に、ユガンダラ山(持双山)とユガンダラ内海があった』『[ここに]イーサダラ山(持軸山)とイーサダラ内海が——カラヴィーカ山(檐木山)とカラヴィーカ内海が——スタッサナ山(善見山)とスタッサナ内海が——アッサカンナ山(馬耳山)とアッサカンナ内海が——ヴィナタカ山(障礙山)とヴィナタカ内海が——ネーミンダラ山(持辺山)とネーミンダラ内海があった』⁶³⁾。『ここに外海があった』『[ここに]大陸(洲)と中間の島々(中洲)が——チャッカヴァーラ山(輪囿山)があった』。『それを支えるものとして水(水輪)があった』『それ(水)を支えるものとして風(風輪)があった』⁶⁴⁾。『その風が依拠するものとして虚空があった』。[cf. MSK 2.2.2]

L13 [風が]起こると、その風は増大する。増大し、いたる所に至り、最大に達する。厚さにおいて96万ヨージャナ[である]。その風(風輪)は直径1203450ヨージャナであり、周囲が3610350ヨージャナである⁶⁵⁾。[cf. MSK 2.2.3]

L14 風の集まり(風輪)の上に雨が降り始める。アーマラカ果の大きさの雨滴をもって、……(意味不明)、多年の間、数百年の間、数百千年の間。[cf. MSK 2.2.4]

L15 その水の集まり(水輪)の周囲にパヴェーサカー(摂持)という名の風たちが吹く。それら(風)はかの水を包みこむものとして、増大する。[cf. MSK 2.2.5]

L16 それら(水輪)は増大し、いたる所に至り《p. 202》、最大に達する。厚さにおいて48万ヨージャナ、直径1203450ヨージャナ、周囲が3610350ヨージャナである。[cf. MSK 2.2.6]

L17 マハーラサー(立世論:「大味」)という名の大地(mahārasā nāma pathavī)が初めてその[水の]上に存在し、位置する。柔らかな、ラサ[という]大地は(rasapathavī [or *rasā pathavī?])増大する⁶⁶⁾。それ(大地)は増大し、いたる所に至り、最大に達する。厚さにおいて24万ヨージャナ、直径1203450ヨージャナ、周囲が3610350ヨージャナである。[cf. MSK 2.2.7]

L18 イーサダラ内海を生じさせ、イーサダラ山を隆起させるものとして [風は吹く]。カラヴィーカ内海を生じさせ、カラヴィーカ山を隆起させて [吹く]。スタッサナ内海を生じさせ、スタッサナ山を隆起させて [吹く]。アッサカンナ内海を生じさせ、アッサカンナ山を隆起させて [吹く]。ヴィナタカ内海を生じさせ、ヴィナタカ山を隆起させて [吹く]。ネーミンダラ内海を生じさせ、ネーミンダラ山を隆起させて [吹く]。外海を生じさせ、大陸 (洲) と中間の島々 (中洲) とチャッカヴァーラ山を隆起させて [吹く]。[cf. MSK 2.2.8]

L19 或る [風たち] は、まん丸い風として吹く。或る [風たち] は、四角の風として吹く。或る [風たち] は、車形になったものとして吹く。或る [風たち] は、半円の [風として] 吹く。東ヴィデーハ洲においてはまん丸い [風が]、西ゴーヤーナ洲においては半円の風が吹く⁶⁷⁾。北クル洲においては四角の [風が]、ジャンプ洲においては車 (sakata) の形に風が吹く。[cf. MSK 2.2.12]

L20 風が [ぐるり] 均等に包みこむように吹く場合、山に峰が出来る⁶⁸⁾。風がひとまとまりに吹く場合、四角にレイアウトされたもの (切り立った崖をもつ山?) が出来る。[風が] 均等に包みこみながら、一方から退いていった場合⁶⁹⁾、山の [内側に] 空洞が出来る。[風が地を] 巻き上げながら [地に] 入りこみ、外に出ていった場合、山の洞窟 (guhā) が口を開く⁷⁰⁾。

L21 《p. 203》それら (大地を取り巻く風?) は周囲が3610350ヨージャナ [ととなり]、半円形 (訂正:円形) である⁷¹⁾。この大地は軟らかく、扱いやすい。譬えば、泥や、最上等の牛乳粥や最上等の生バターやバターミルクのように、全くその様に、この大地は軟らかく、扱いやすい。その [大地の] 中央に、生ける者たちが有する業の支配的な力によって、四角形に風が吹く。内側の大海 (須彌海) を生じさせ、スメール山王を隆起させるものとして。或る風は [山に] 吹きあたる。或る風は [山を] 包みこむ。或る風は [山の] 周りを生じさせる。或る風は [山頂の] 峰峰を作り上げる。或る [風は] スタッサナ城 (善見城) の掘を生じさせ、スタッサナ城を隆起させるものとして [吹く]。或る [風は] ナンダ池 (歡喜池) を生じさせ、ナンダ園を隆起させるものとして [吹く]。或る [風は] チッタカー池を生じさせ、チッタラター園 (衆車園) を隆起させるものとして [吹く]。或る [風は] パールサカ池 (饑悪池) を生じさせ、パールサカ

園を隆起させるものとして [吹く]。或る [風は] ミッサカ池 (相雑池) を生じさせ、ミッサカ園を隆起させるものとして [吹く]。[或る風は] ユガンダラ内海を生じさせ、ユガンダラ山を隆起させるものとして [吹く]。[或る風は] イーサダラ内海を生じさせ…… (略)。風が形成したそれらの山々の誕生によって、この大地に [様々な] 高さが現われる。[或る場所 (スメール) では] 8万ヨージアナの高さが現われる。[或る場所 (ユガンダラ山) では] 4万ヨージアナの高さが現われる。[或る場所 (イーサダラ山) では] 2万、[或る場所 (カディラカ山) では] 1万、[或る場所 (スタッサナ山) では] 5千ヨージアナ、[或る場所 (アッサカンナ山) では] 2千5百ヨージアナ、[或る場所 (ヴィナタカ山) では] 1千2百ヨージアナ、[或る場所 (ネーミンダラ山) では] 625ヨージアナ、[或る場所 (チャッカヴァーラ山) では] 312と半ヨージアナの高さが現われる。

L22 すべての成立条件が調った時に、地の要素 (地界) と火の要素 (火界) が増満する。四つの要素 (四界) が成立する。[それらは] 一切を堅固さへ導く。一切が堅固さに導かれた時、一切の宝珠と宝石と《p. 204》鉱物資源が現成する。[cf. MSK 2.2.13]

L23 一切の宝珠と宝石と鉱物資源が [成立に] 導かれた時、天は雨降らず、アーマラカ果の大きさの雨滴をもって、えんどう豆の大きさ [の雨滴] をもって、隠元豆の大きさの [雨滴] をもって、…… (意味不明)。数百年の間、数千年の間。[雨水は] スタッサナ城の堀を満たすものとして、ナンダ池、チッタカ池、ミッサカ池を満たすものとして [満ち]、また内にある大海、内にある諸大陸を満たす。このような次第で、一切が満たされる⁷²⁾。[cf. MSK 2.2.14]

注

- 1) 翻訳に用いた底本は、K. OKANO (1998a) である。
- 2) 立世阿毘曇論の原題は、lokaprajñapti [-abhidharmasāstra] であったと思われる。立世の「立」とは、(席などを) 設ける、置く、設置・設立・建立する、という意味の動詞 prajñāpayati が名詞化した prajñapti の訳であろう。「立世」とは世界の設立という意味であろう。ただし起世経・起世因本経の「起」や、世記経 (世起経、世紀経が正しい題か?) の「記/起/紀」が、「立」と同様に prajñapti の訳であるかどうかは今のところ不明で、ガンダーラ語の資料が出てくるまで判断できないが、世界の設立 (lokaprajñapti)

が、世の起源という意味にゆるく解釈され、そう訳された可能性はあるだろう。大樓炭経の原題はわからない。

- 3) 拙稿『『大いなる帰滅の物語』(Mahāsaṃvartanikathā) 第2章4節～第4章1節と並行資料の翻訳研究』、『哲学年報』63輯、2004年3月、1-110頁。
- 4) 原文 svabhūta-karmottham を「自ら存在する業の力によって生じ」と訳したが、もし svabhūta の語を「自ら存在する者」(= svabhū = Brahmā) と理解するならば、「それは自ら存在する者(梵天)の業の力によって生じ」と訳すことも出来る。しかし仏教徒はそのような教理の誤解を招く危険がある表現を梵天に使わないであろう。創造神が svabhū (自生者) であるというバラモン教の宇宙創造説は仏教の業生説と真向から矛盾する。
- 5) 「輝きから」と訳した原文は 'od gsal nas で、私は文字通りに訳したが、しかしこのチベット語は「アーバースヴァラ天(光音天)から」と解釈すべきなのかもしれない('od gsal = ābhāsvarāḥ, Mvy. 3092)。しかし梵天ではなく梵天の宮殿のことであるし、また MSK 2.1.1 には prabhāsuram (強く輝く) という、梵天宮殿に付けられた形容詞があり、その形容詞が 'od gsal nas の原語にあたる可能性がある。
- 6) 先のドイツ語の出版本 OKANO (1998a) では A 写本の読み atesadābhāsvara を *athosad-ābhāsvara と直し、それに従ってドイツ語訳した。「すると、ある一人の生ける者が、善いアーバースヴァラ天の住所から死後に転生し、[梵天の宮殿に]入り、」という意味になる。しかし本論文では B 写本の読み athaitad ābhāsvara に従って訳した。その場合、etad (Ac. sg. n.) は vimānam (梵天の宮殿に) を意味し、praviśya の目的語となると解釈できる。
- 7) 成劫の初めに出現した大梵天が10中間劫 (antarakalpa) の間独住したことは立世論 (T XXXII, 223c14-15) と Loka-p (I, p. 198) に典拠が見出される。他部派の文献に10中間劫という具体的な記述はない。その表現を長部ニカーヤの相当箇所を確認すると、「極めて長い時を」(ciraṃ dīgham addhānaṃ) という表現になっている (Brahmajāla-suttanta, DN, I, p. 17; Pāṭika-suttanta, DN, III, p. 29)。【部派的相違点1】
- 8) 三十三天よりも上位の神々は個別の宮殿 (vimāna) をもって生まれる。俱舍論世間品第69頌。
- 9) チベット訳は「そして20劫の終わりに」(de nas bskal pa nyi shu'i mtha' ru) と訳すが、「そして10劫の終わりに」の間違いであろう。MSK の対応偈 2.1.4 や立世論や文献 X (§ 204 の箇所) で10劫と理解していることが確認できるので、20劫を10劫に訂正する。
- 10) 『梵天の近侍である神々』(tshangs pa'i 'khor gyi lha = brahmapariśadyaḥ cf. Mvy. 3086) という神々のクラスは、有部では梵天界の3クラス (mahābrahmaṇaḥ (pl.), brahmapurohitāḥ, brahmakāyikāḥ) の中に説かれませんが、パーリ上座部の説く梵天界の3クラス (mahābrahmā (sg.), brahmapurohitā, brahmapārisajjā) では梵天の最下位の神とされ、また法蔵部(世記経、起世経)の説く梵天界の4クラスでは大梵天に次ぐ第二位の神である。立世論や MSK から知られる正量部の見解では、この『梵天の近侍である神々』は、大梵天と同じ世界に棲んでいるわけであるから、一箇の独立した世界としては認められず、梵天の3クラスにカウントされない。このことは、カシュミールの有部の諸

師が、大梵天と梵輔天が同じ世界に属すると見なすことと同様である(俱舍論世間品第2頌積;ただしその場合、阿毘曇心論の説くように梵天界は3クラスではなく2クラスになる)。**【部派的相違点2】**

- 11) この大梵天が抱いた自分は創造神であるという誤解については、どの部派の伝承も同様に伝える。俱舍論においては世間品第5頌積の七識住の議論でやや詳しく取り上げられる。
- 12) 梵天が「大神通力をもつ者」(maharddhika)であることについて、立世論にも(224a2)大梵天は「大神通及び大威徳を有する」と説かれる。その表現はパーリの長部ニカーヤでは「より大威力をもつ者」(mahesakkhataro)という表現になっている(Brahmajāla-suttanta, DN, I, p. 18; Pāṭika-suttanta, DN, III, p. 30)。
- 13) 大梵天が第10劫まで独住した後、その同じ世界に『梵天の近侍である神々』が生まれてきた時期が第11劫である。大梵天の世界とは別に、『梵天の近侍である神々』の世界がその下方に成立したわけではない。文献Xの§204では次のように成劫の20劫の内訳が説かれている:「独りブラフマー神は[初めの]10劫の間住する。彼の侍者たちの住処は(de yi 'khor gnas)、[第11劫の]1劫で形成された。[その後]ブラフマ・カーイカ天から下はヤマ天に至るまで、それぞれ[の天の住処]は[第12劫から第17劫まで]各1劫ずつかかって[順に]出現する。大地、山などは[第18劫の]1劫で形成された。自ら光を放つ者たち(原=人間)は[第19と第20劫の]2劫かかって形成された。[こうして]太陽の誕生の時に至る。このように成劫が[全部で]20劫[経過する]」。
- 14) 第12劫に大梵天と梵眷天から成る一世界(大梵天)の下方に、梵身天という別のクラスの神々の世界が生じる。そしてその後、第13劫に、梵輔天がさらにその世界の下方に生じる。
- 15) 他部派の伝承と容易に区別できる、犢子正量部の独自の伝承の一つは、brahmapurohitaの世界が梵天界の最下位となることである。上から順に(1) mahābrahman、(2) brahmakāyika、(3) brahmapurohitaとなるその序列は立世論でも確認される(198b4-5、206c6-10、215b11-16、大梵天・梵衆天・梵先行天)。このような梵天界の序列における部派的差異は、現存する小乗の諸文献がどの部派に属するかを判定するためのツールとして今後の学問の役に立つ。ただしこの梵天界の序列に関して、例えば Loka-p (I, pp. 64, 200) では他部派伝承との contamination が起こっている(L9; 注61を参照)、そのような事例があることにも注意が必要である。なお正量部が mahābrahman の世界と『梵天の近侍である神々』(tshangs 'khor gyi lha rnam 文献X §§5～8)の世界を同一であると見なしていたことの証拠として、有為無為決択の第20章の正量部の教義文において(1) tshangs 'khor gyi lha (= *brahmapāriṣadya)、(2) tshangs ris kyi lha (= *brahmakāyika)、(3) tshangs pa'i mdun na 'don gyi lha = *brahmapurohita) という梵天界の序列が説かれており(並川(1992b), 31頁を参照)、その序列では(1)の地位で brahmapāriṣadya が mahābrahman と入れ替わることが確認できる。つまり両者は同じ世界に属するので、どちらの名称を出しても正しいのである。また犢子部の三法度論も「梵富樓(*brahmapurohita)、梵迦夷(*brahmakāyika)、梵波産(*brahmapāriṣadya)」という梵天界の下からの序列を説き(T XXV, 28c4-5)、その三法度論の異訳である四

阿含暮抄解でも同様の序列を示す (T XXV, 14a12)。次に、犢子正量部以外の部派の伝承を見てみると、まず説一切有部が伝承する梵天界の序列は、(1) mahābrahman、(2) brahmapurohita、(3) brahmakāyika となる (有部内での異論は省く)。また法藏部 (世記経等) の伝承では、(1) mahābrahman、(2) brahmapāriṣadya、(3) brahmapurohita、(4) brahmakāyika という序列である。世記経 T I, 136a, 起世経 348b、起世因本経 403b、また舍利弗阿毘曇論 T XXVIII, 601a を参照。またパーリ上座部では、(1) mahābrahman、(2) brahmapurohita、(3) brahmapāriṣadya という序列である。このパーリ上座部の梵天界の3クラスの伝承に関しては Bhikku BODHI & Mahāthera NĀRADA (2000), p. 192; 戸田忠・ウ=ウエープツラ (1980), 128頁; 浪花宣明 (1998), 376頁を参照。ただしまだ宇宙論が完全に固まっていない時代のパーリ経 (SN, I, pp. 155-156; MN, I, p. 330) では brahman, brahmaparisā, brahmapārisajja の三クラスが説かれる。YASHPAL (1999), I, p. 116 を参照。このように上座部の諸部派の伝承はお互いに違っている。次に大衆部説出世部の Mahāvastu にみられる梵天界の序列を見ると、すでに KIRFEL (1920), S. 191 が指摘しているように、SENART 校訂本第2巻の3箇所 (314頁と348頁と360頁) にある梵天界の記述が完全に合致しないので、その解釈が多少厄介である。314頁の記事 (散文) では、下位から順に、brahman, brahmakāyika, brahmapurohita, mahābrahman と四梵天が挙げられている。348頁の記事 (散文) では、下位から順に、mahābrahman, brahmakāyika, brahmapurohita, brahmapārṣadya と四つが挙げられている (この箇所の mahābrahman は brahman の誤りであろう)。しかし360頁の記事 (韻文) では、下位から順に、brahman, brahmakāyika, brahmapurohita, brahmapārṣadya, mahābrahman と五つも挙げられている。この説出世部の伝承では、梵天界は四つのクラス (brahman, brahmakāyika, brahmapurohita, brahmapārṣadya) から成り、そして brahmapārṣadya と mahābrahman とは、正量部伝承の如く同一の世界に属するのではないと思われる。これに関して、Mahāvastu に近い大衆部系の仏伝を部分的に利用して作られた仏本行集経の中に (T III, 693b10-12)、梵天 (brahman)・梵衆天 (brahmakāyika)・梵輔天 (brahmapurohita)・大梵天 (mahābrahman) という、Mahāvastu に見られる序列とよく合致する4クラスの梵天界の序列が出てくるため、それが Mahāvastu の梵天界の記事を確認するための一つの資料となろう。なお、大乘の仏伝 Lalitavistara の第12章 Śilpaśaṃdarsana-parivarta の付加増広部分 (本来の原形に無かった部分) では、下から順に brahmakāyika, brahmapurohita, brahmapārṣadya, mahābrahman という四梵天が挙げられている (LEFMANN ed., p. 150; 外園幸一 ed., p. 578)。その他の大乘の経論に見られる序列については望月佛教大辞典、3772頁を参照。【部派的相違点3】

- 16) ここで愛神カーマと同一視されているのはマーラ (魔天 māra pāpiyas) である。Amarakośa, I, 1, 20 を参照。このカーマ神とマーラの同一視は Buddhacarita I 27, XIII 2 等でも確認できるが、最も古い典拠は Dhammapada 46 である (魔は花の矢をもつ)。YASHPAL (1999), I, p. 153 を参照。初期経典より、マーラは欲界 (kāma-vacaraloka) の支配者と表現されるため (SN, I, p. 133)、宇宙観が体系化されてくると、その住居は梵天

界(色界)よりも下の、六欲天の頂上に位置すると見なされた。魔天を他化自在天と同一視するかどうかの問題となるが、法蔵部では他化自在天の宮殿と魔天の宮殿を別立する。魔天の宮殿は他化自在天と梵身天との中間に位置すると長阿含世記経(T I, 115a29)は説く。また起世経(T I, 311a21-22)、起世因本経(T I, 366b3-4)を参照。大衆部説出世部の Mahāvastu も魔天の宮殿を他化自在天の宮殿と梵天界の間にあるものとして説いている(II, 360)。大乘の仏伝 Lalitavistara も魔天(mārakāyika)を別に扱っている(LEFMANN ed., pp. 46-47; 外蘭幸一 ed., p. 364)。大乘の瑜伽師地論では「復た魔羅天宮あり、即ち他化自在天の摂なり。然も處所は高勝なり」と説かれ(T XXX, 294c25-26)、魔天宮は他化自在天の世界に属するが、他化自在天の神々の住所よりも高きに位置すると見なされた。MSK 2.1.10に見られる描写は、この瑜伽師地論の意見と合致する。なお有部アビダルマやパーリ上座部アビダルマは、魔天の位置、有り方について(私が調べた限りでは)故意に沈黙している。**【部派的相違点4】**

- 17) ここまでで梵天界(brahmaloka)の形成が終わったので、以下は六欲天の形成に移る。成劫時に神々の世界の形成が一つずつ上から順になされてゆく描写は、世記経にも有る(T I, 138c-139a)。ただしその天界形成のプロセスの詳細はかなり異なるし、MSK や文献Xに見られる正量部伝承のように、一つの天界の生成に1劫ずつかかるという記述は世記経(や起世経や起世因本経)の法蔵部伝承には無い。有部の論書にも無い。**【部派的相違点5】**
- 18) 仏教宇宙論において、阿含・ニカーヤの時代に成立した低い神々のクラスの中に、他化自在天(「他者に化作された(神通力で創造された)ものを自由に操る」神)や化樂天(「化作の行為を喜ぶ」神)のような、奇妙な名前をもつ神々がなぜあり、なぜ梵天とインドラの天界の間の空間に置かれるに至ったのか不明である。奇妙な名前の背後には本来何らかの神話が隠れていたのであろう。化作(創造)を喜ぶ、化作されたものを支配する、という表現から判断して、創造神・梵天に近い力をもつ、梵天に準じる神々と考えられて、インドラの三十三天より高いが梵天の世界に準じる位置に置かれたのであろうか。
- 19) 作者 Sarvarakṣita はここで虚空に生じた神々の宮殿を「泡の集積に似た」(phenocayanibha)と表現しているが、この「泡」というイメージは、世記経が、神々の宮殿は僧伽という名の風によって虚空に飛散した水の泡から出来た、と説いていることと偶然にも(?)重なり合う:「有僧伽風、吹水令動、鼓蕩涛波、起沫積聚。風吹離水、在虚空中。自然堅固、變成天宮、七寶校飾。由此因縁、有兜率天宮」(T I, 139a4-6)。
- 20) 有部の教義(俱舍論世間品第90頌[冠導本卷12-5b]、大毘婆沙論 T XXVII, 692c8-9)によれば、成劫の第1劫において器世間(bhājanaloka)が、残りの19劫において有情世間(sattvaloka)が成立するが、正量部の教義においてはそうではない。MSK のこの節や立世論の記述から確認できる正量部の教義においては、器世間の成立期と有情世間の成立期は別々に分けられず、両者の成立は同時進行のかたちで進む。なお、このような正量部の説は、大毘婆沙論の中で一つの異説として紹介されている[有説、十劫器世間成、十劫有情漸住]の説(692c6-7)と関係があるものかもしれない。少なくとも成劫後半の「十劫有情漸住」は正量部説と合致する。その説が変化して、大梵天の独住が10劫続き、第11劫から大梵天より下位の神々の形成が始まった、という正量部独自の説になったのかもしれない

い。【部派的相違点 6】

- 21) ここまでの出来事で第2章第1節を終えているのは、成劫における世界生成を2期に分け、虚空に居を構える梵天からヤーマ天までの上方世界が形成される第1段階の生成と、山住の神々である三十三天から風輪までの下方世界が形成される第2段階の生成とに、区分する考えが正量部にあるからである。以下の第2節で、その第2段階の生成期が語られる。
- 22) 世界の下方を訪れたヤーマ天の前世の想起がそのまま地上世界の設計図となり、ヤーマ天の身体が起こした風から風輪が出来、水輪が出来、地上世界が出来るという興味深い見解は立世論で確かめることが出来る (224c3-225a25)。これは有部の論書には見られず、正量部特有の見解であると思われる。【部派的相違点 7】
- 23) ここから始まる、ヤーマ天に起因して風輪が形成される記述において、立世論の漢訳テキストには一箇所、中国の写経生が写経紙の頁の順序を間違えたために生じた奇妙な混乱があり、224c13の「境水」から225a5「鐵圍山」までの全文を225a25の「究竟」と「起成」の語の間に挿入するという訂正を施して読まなければ意味が通らない。立世論のパーリ語の抄訳である Loka-p はその混乱を免れている。
- 24) 有部やパーリ上座部の伝承におけるユガンドラ (yugaṃdhara) という語に対して、MSK 写本Aにこの語が出てくる三箇所 (2.2.2, 2.2.10, 2.3.13) の全部においてユガンドゥラ (yugaṃdhura) と綴られているため、本文批評の立場からその綴りをあえて尊重した。それは yuga (軛) と dhura (軛の肩に置く部分) の複合語と思われるが、yugaṃdhara (軛を支えるもの、轅) に比べて不自然な感否めない。このような奇妙な綴りが特定の部派の独自の伝承なのかどうかは定かではなく、その綴りは少なくとも文献Xの蔵文訳や、Loka-p のパーリ語形によっては支持されない。
- 25) 立世論はこれについて「是の夜摩天の身形は最大にして飛行捷疾なり。行くこと疾きに由るが故に風輪を撃起す」(225a13-14) と説明する。
- 26) ここで雨による風輪上の水輪の形成が語られる。同様の説は俱舍論 (世間品46頌釈) 等の有部の諸論書にも見られる。なお彰所知論に (T XXXII, 226b)、風輪の上に生じる金蔵という名の雲が大雨を降らし、その水を風が支えて水輪が出来ることが記されるが、この金蔵雲の記述は大乗の瑜伽師地論の説くところ (T XXX, 286c18-19) と同じである。梶山雄一 (1997)、11頁を参照。
- 27) 風が水輪を包み込んで支えるという説は、俱舍論世間品第46頌釈や順正理論 (T XXIX, 515a12) や顕宗論 (T XXIX, 849c29) によれば、「他の部派の者たち」(nikāyantariyāḥ 有餘師) の説くところである。その説に対する有部のいわゆる正統説は、風ではなく有情の業力が水を支えているという説である。ここに有部とそれ以外の部派が対立する論点の一つがあるらしい。立世論を見てみると確かに MSK と同じ立場で、有部とは異なる立場を取る。立世論 (225a20-23) は水輪の周囲に摂持 (*praveśakā) という名の風があり、水の集まりが散ることがないように絶えず吹き起こっていると説く。大乗の瑜伽師地論 (T XXX, 286c16) も、水を横側から流れないようにする風の流れと、水が下に漏れないようにする風の流れの、二種の風の相を説くから、俱舍論等の有部の見解と異なる立場を

取るわけである。【部派的相違点 8】

- 28) チベット訳では「底知れないほど深い」という形容詞が風に掛かり、水に掛かっていないし、構文がおかしい。MSK に従い、その形容詞が水に掛かる形にし、構文を直して、訳した。つまり de'i tshe rlung de zab pa gting dpag dka' ba des kyang chu'i phung po'i 'og dang steng dang khor yug tu bskor te gzhi rten byas so /という文を、de'i tshe rlung des kyang chu'i phung po de zab pa gting dpag dka' ba'i 'og dang steng dang khor yug tu bskor te gzhi rten byas so /と読んだ。
- 29) 「力強く」——*sahobhiḥ (私が推測した読み)。ここは読みが確定できない箇所である。写本 A では sadeteḥ とあり、意味不明である。写本 B では初めに sadeteḥ と書いた後に sah[ai]taiḥ と書き直しているが、saha + etaiḥ でも文脈に適した意味にならない。私の先のドイツ語版校訂本では写本 A を尊重して *sadetaḥ (sadā + itaḥ) 「つねにここから」と修正を試みたが、その読みも満足できるものではない。そこで今回の日本語訳では私は新たな提案として *sahobhiḥ 「力強く」と読むことにした。
- 30) この詩節の解釈は難しい。まるで着地することでそこに滞在地を得ようと願っている、常に漂いながら旅をしている、寄る辺のない雲たちが、着陸点がどこにも見つからないのであきらめ、その領域を見捨てて、いなくなったかのように、雲が一つもない青い空が、下界にも現われるかのように、澄みきった青い水を湛えた水輪が出現した、という意味か。
- 31) 立世論 (224c16-18) にも、MSK とほぼ同様の出来事の前後関係の中で「此の水輪上に別に地界有り、名を大味 (*mahā-rasa or -rasā or -lasā) と曰う。劫初の感起に日夜稍厚くして轉た堅し。譬えば煎乳の凝冷之時に、厚膏は上を覆うが如く、大味の地界の最初に起こる時も亦復是の如し」と説かれる。冷えてゆく煮られた乳に乳膜が生じるという譬喩は、俱舍論世間品第47頌釈や起世経等 (I, 358b) にも出てくる諸部派共通のものである。しかし注意すべきことは、立世論や MSK などの正量部系の諸文献には、有部が用いる「金輪」(kāncana-maṇḍala) という特殊な表現が出てこないことである。どうやら正量部は(そしてパーリ上座部も)、有部のように黄金所成の金輪の表面上に土で出来た大地があるという考え方をしないで、金輪と大地を区別せず、金輪にあたるものの大部分が黄金でなく地で出来ていると考えるのであろう。ただしスメール等の山々は宝石や金から成るものである (2.2.13)。【部派的相違点 9】
- 32) ここで恐らくリングは、ヨーニと呼ばれる水盤か池の上に、男根の柱が突き立っている形状のものがイメージされているのであろう。水盤が海を、柱がスメール山を意味する。
- 33) MSK によれば、九山は半身を水に没しているが、これは立世論の説明と一致し、またこの点で有部は正量部と見解を異にする。立世論によれば、九山のそれぞれの大きさは異なるが、どれも下の半分が海に没し、上の半分が海上に出ている。立世論の数量品第七に詳しい説明がある (181a12-b26)。それに基づく山々と内海の断面図は、先のドイツ語での出版本 OKANO (1998a), S. 180, Abb. 4 の図や、小野玄妙 (1933), 104頁の図を参照。この断面図は、同じ立世論の大三災火災品第二十五にある説明 (225b5-13) に基づく断面図と少し食い違う。後者の断面図については OKANO (1998a), S. 171, Abb. 2 の図を参照。他方、有部によれば、九山の水面下の深さは一様に8万由旬であって、水上に出ている高さがそ

れぞれ山によって異なる。水上と水面下の割合がそれぞれ半分半分になるのはスメール山だけで、他の山々においては身の丈の大部分が水面下となり、やっと頭だけ水上に出しているかたちになる。俱舍論世間品50~51頌に説明がある。OKANO (1998a), S. 180, Abb. 5の図や、小野玄妙 (1933)、67頁の図を参照。なお、パーリ上座部の註釈書類に見られる見解はこの点に関して正量部と同じである。佐々木 (1960)、506頁の Atthasālinī や、浪花 (1998)、521-522頁の Sārasaṃgaha 第40章の記述を参照。また及川・村上 (1985-1989) 第2巻、699-700頁に図があり、また同書第3巻の301頁注20に、註釈家ブッダゴーサに帰せられる三つの著作 (Atthasālinī 297-298, Visuddhimagga 205-207, Samantapāsādikā I, 119-120) に宇宙論の説明があることを指摘している。それらのパーリ註釈期の諸文献に断片であるが見出される宇宙論の記述は、立世論の正量部宇宙論と比べてみると一致点が多く、明白に両者の間に影響・借用関係が窺える。**【部派的相違点10】**

34) 有部伝承ではチャクラヴァーダ (cakravāḍa) という語形であるのに対し、MSK の正量部伝承ではチャクラヴァーラ (cakravāla) である (パーリの伝承も cakkavāla である)。なお法蔵部の伝承 (世記経 139b17-28) では「金剛輪山」と「大金剛輪山」という大小二つのチャクラヴァーダ山が説かれている点で、大衆部説出世部の Mahāvastu の伝承 (ed. SENART, I, 6; II, 300 cakravāḍa-mahācakravāḍa) と共通する。所属部派不明の増一阿含の七日品第四十之一にも鉄圍山と大鉄圍山が説かれている (T II, 736a, c)。法蔵部や大衆部説出世部などの部派が持っていた、大小二つのチャクラヴァーダ山という特殊な地理観は、大乘の法華経 (第11章、18章、22章) にも受け継がれていることが興味深い。それらの西北インドに栄えた二つの小乗部派と法華経 (の布施造岳のいう第二類と第三類の部分) との関係を示すものである。**【部派的相違点11】**

35) MSK のこの説明によれば、最も外側の七番目の内海と外海とは、四大陸の間の四帷 (西北・西南・東南・東北) でつながっていることになるが、これは有部の描く世界図と異なる。有部の伝承では最も外側の七番目の内海と外海とはニミンダラ環状山脈によって隔てられている。隔てられているから内海は外海のように塩辛いのではないのである。有部説では四大陸に接しているのは外海だけである。この両部派の世界図のずれは、正量部説が七つの内海のさらに内側にスメール山を囲むスメール海 (須彌海) の存在を認めるのに (立世論 181a16, 225b6)、有部説 (俱舍論等) ではそれを認めないことに起因する。岡野 (1998b)、81頁を参照。**【部派的相違点12】**

36) この段落のチベット訳は五つの文から成るが、それらは10音+9音+9音+9音+8音から成る。10音の後の9音+9音+9音+8音の箇所は一つの韻文かもしれない。

37) 九山とは七つの環状山脈とスメールと輪圍山である。

30 38) 立世論に「風界恒起吹一切物使成堅實。既堅實已一切諸寶種類皆現」(225b15-16) とある。立世論の記述は、出来事の前後の順序を見ても MSK とよく合っている。立世論 (224c24-225a28, 225b14-22) に説かれる地上世界の創造の順序は、基本的に中央のスメールから次第に外へ向かってゆくもので、スメール→七山と七内海→外海と輪圍山→四洲の順で創造がなされて、その後九山の宝石の生成→大雨の順で創造の仕上げがなされる (ただし立世論の漢文テキストでは四洲の創造の前の箇所、筆写生が写す紙の順番を誤ったために

生じた混乱があるために、この順序がわかりにくくなっているが、Loka-p に従って直すことが出来る)。この立世が示す一連の創造の順序は MSK と一致するが、特に九山の宝石の生成→大雨という記述の順序は世記経等の他部派の文献には見られないので、正量部独自の伝承なのであろう。有部の伝承(世間施設)では、大雨が降って海が形成されるといふ事件は金輪の形成の直後であり、金輪→雨による海の形成→スメール(風によって海水が凝固せしめられ四種の宝石で出来た山が出来るといふ順序で起こる。福田琢(2001)、62頁の「11-16. 海の形成」を見よ。なぜ地上世界の創造の時に雨が大地に降ると、水からスメールを形成する四種の宝石が出来るといふ問題については俱舎論第50頌釈に説明がある。【部派的相違点13】

- 39) この詩の pāda cd の文の解釈は難しいが、恐らく次のような裏の意味があるであろう：「偉大な気高い精神たちが案内してくれる、平正な進路は、低劣な生き方を楽しむ女たちとはかかわりがない」。
- 40) この出来事は立世論(225b16-22)の、地上形成の最期に大雨が降って世界中の池や海に水が遍満するという記事にあたる。
- 41) チベット文の「大地は泥だけから出来ている」(sa gzhi ni 'dag pa'i rang bzhin kho na'o.) という一文は浮いていて奇妙であり、チベットの翻訳者がここで誤りを犯した可能性がある。恐らくその言葉は前文に入って「泥だけから出来ている大地は、業の力によって生じた風によって徐々に堅い性質となり、[...]」と、前文の主語になるのではないか。
- 42) スメール山頂の東西南北にある四つの峰については、立世論(190b10-18)や俱舎論世間品第65頌に記述がある。
- 43) スメール山中腹の四層の出張り(層級)については俱舎論世間品第64頌を見よ。立世論では天非天闘戰品第十八に詳しい説明がある(193c13-194b2)。
- 44) Sarvaraṣṭa がここでスメール山の姿を「ストゥーパのように」と表現していることは、近代の諸学者によって「ストゥーパは何を象徴しているか」という議論において出された、ストゥーパは宇宙山つまり須弥山世界の表現であるという一つの意見を支持するインド仏教内部からの根拠資料になろう。またストゥーパといっても土饅頭型ではなくむしろ四層のテラスがある楼閣をイメージしているらしいことが本詩節から知られる。スメール山に四つの層級があることが、土饅頭型から出発した仏塔をやがて石造や木造の多層の楼閣構造に変えた理由であるとも考えられる。またこのスメール山と仏塔との同一視を、他の仏塔の細部に応用すれば、ストゥーパの頂にあるハルミカーも、スメール山頂の神の王都スダルシャナの宮殿を表現したものと(P. Mus の主張のように)解釈できるように思われる。杉本卓洲(1984)：『インド仏塔の研究』、240頁；K. SANKARANARAYAN (2000)：“Mount Meru in Buddhist Cosmology: A New Perspective”, *Prof. K. V. Sarma Felicitation Volume*, Chennai, pp. 186-187 を参照。
- 45) スメール山上の神々の住処の地面が様々な鉱物・宝石によって蔽飾され、また地面は綿のように柔らかく、足を置くと地が没し、足を上げるとまた地が元に戻ることにについては、俱舎論世間品第66頌釈に記述がある(ed. PRADHAN, p. 167 = ed. ŚĀSTRĪ, I, p. 522)。同様の説が立世論でも確かめられる(182c28-183a5)。これはウツラ・クル洲の世界の描写と

一致する。世記経の鬱單曰品第二に同様の表現がある (117c-118a)。

46) 立世論の天住處品第八 (181c18-22) や施設論世間施設卷三に神の王都スダルシャナ (善見城) の詳しい描写が有る。純金の環状圍壁で囲まれ、諸城門は衆宝の所成で種々の摩尼の嚴飾する所であるという。

47) 天界においては月や太陽が無いので、ある特定の花が昼に閉じているか開いているかで、昼と夜の区別を立てることについては、俱舍論世間品第80頌釈とヤショームトラ疏 (ed. ŚĀSTRĪ I, pp. 531-532)、また大毘婆沙論 (T XXVII, 701a) を参照。その有部の伝承と同じ伝承が正量部にもあったことがこの MSK の偈から確認できる。

48) MSK においては yugaṃdhara は yugaṃdhura と綴られる (2.2.2 とその注を参照)。ユガンダラ環状山脈にはその東西南北の四面において、四大王天の四王の都が有り、それぞれに Dhṛtarāṣṭra (東)、Virūḍhaka (南)、Virūpākṣa (西)、Vaiśravaṇa (北) の王が居ると瑜伽師地論は説く (T XXX, 287b2-3)。それと同様の地理観を立世論ももち、特に卷四第十四品から第十七品にかけて四王の棲む都城の様子を極めて詳細に描写する (190b-193b)。世記経も、立世論ほど詳しくないが、四天王品第七において似た様な地理的描写をする。しかし世記経に見られる法蔵部伝承は四王がユガンダラではなく、スメールの東西南北それぞれの方角の千由旬の所にある都城に住むとする点で特異である。【部派的相違点14】

49) この箇所ではチベット訳は「四つの『圍繞するもの』 ('khor mo) が生じた」と伝えるが、その 'khor mo (= *pariṣaṇḍā の語は、間違いである疑いが濃い。スメール以外に、ユガンダラなどの山脈にも別名『バルコニー』と呼ばれる層級 (pariṣaṇḍā) があるはずはない。そのため、MSK の対応偈 2.3.13 の記述に従い、「四王によって内部が飾られた四つの都城 (*grong khyer) が生じた」と訂正する。

50) 二種の神々とは、四大王天と三十三天という、二種の神々を意味するのであろう。ただし私が先に発表したドイツ語訳では男と女の二種と解釈した。

51) 集会場スダルマー (善法堂) は、半月の第 8・14・15日において神々が世間を觀察して行為の善悪を審議する場所である。この堂の名はすでに初期經典に登場する (DN, II, pp. 268, 274; MN, II, pp. 80-81; Theragāthā 1198, cf. YASHPAL (1999), I, p. 99)。立世論の天住處品第八や施設論世間施設卷三にそこでの神々の審議についての詳しい記述がある。善法堂は有部説 (俱舍論世間品第68頌) によれば都城の外の南西にあるというが、犢子正量部の立世論 (183b2) では都城の外の西北にあるという。法蔵部の世記経 (131b8) では都城の内側にあると見なしている。【部派的相違点15】

52) 原文 karna-samipam āgatam (直訳すれば「耳元にやって来た」) を「耳元にもたせかけた」と訳してみた。しかし種々の楽器を生じる樹が天界にあって、「諸天や天女たちが或る形で [何かを] 欲する心を生ずると、たちまち、そのとおりに [それは] 彼らの手にやって来る」 (lha 'am lha'i bu mo nmams kyis ji lta bur 'dod par (D: pa) sems skyed ma thag tu de lta bur de dag gi lag tu 'ong bar 'gyur ro) という文が施設論世間施設 (大谷 No. 5587, 東北 No. 4086) のテキストに何回か繰り返されるので、楽器は文字通り「やって来る」のかもしれない。福田 (1999), p. 42, 福田 (2000), pp. 42, 44 の和訳を参照。なお、

- MSK テキストの *karṇa-samīpam* (耳元に) をもし **kara-samīpam* (手元に) と読めば、上述の施設論の記述とよく合うことになるが、しかし韻律がそれを許さない。
- 53) 三十三天の神々が遊び戯れる場所としてスダルシャナ城外に四つの園林があり、それらには中央に大きな池があり、妙花・宝舟・好鳥が見られることについては、大毘婆沙論に記されており(XXXVII, 692a7-16)、また立世論の天住處品第八には、宝池で諸天が船で遊戯する様が描かれる。本詩節の内容はそのような伝承を踏まえた空想であろう。
- 54) 三十三天とアスラの戦闘については初期經典のあちこちに記述があり(DN, II, p. 285; SN, I, pp. 216-227, IV, pp. 201-202, V, pp. 447-448; AN, IV, pp. 432-433, etc. cf. YASHPAL (1999), pp. 107-109)、その聖典の記述は立世論の天非天闘戰品第十八(193b-195a)や世記経戦闘品第十(141a-144a)や施設論世間施設に引き継がれ、より詳しくなる。世間施設の文は福田(1999)、33～40頁の訳文を参照。
- 55) 作者はここで神(*deva*)というもののあり方を説明するために、その語の通俗語源説の言葉遊びとして、*divyantah*「遊び戯れる」(または「輝いている」)という表現を使った。立世論 198a5-10 (= *Loka-p I*, p. 63)に、提婆(*deva*)という語の種々の語源解釈が説かれる。
- 56) 正量部宇宙論(MSK、立世阿毘曇論など)の伝承によれば、成劫の第1劫から第10劫まで梵天が独住し、第11劫から第17劫まで各劫ごとに梵天より下級の神々の世界が形成されてゆき、ヤーマ天まで階層状の世界が虚空に出来る。第18劫にスメール山等に棲む地上の神々の世界が完成し、残る第19劫と第20劫で、太陽が出現するまでの地上世界の人間の歴史(アッガンニヤ神話の冒頭部分)が説かれる。有部の教義との大きな違いについては、2.1.14の注を参照。また正量部伝承(MSK 4.4.17等を参照)では住劫は太陽の出現によって始まるが、有部伝承では住劫は地獄の出現から始まる。また正量部の理論では、住劫の第1～第8劫は人間の寿量に変化なく、寿量の減少が開始され小三災が起こるのは第9劫からであるが、それに対し、有部の理論では、住劫の第1劫から寿量の下降が起こり、各劫ごとの下降と上昇の反復運動が開始される。**【部派的相違点16】**
- 57) OKANO (1998a) では私の立世論の独訳は注のかたちで本のあちこちに散らばっており、一箇所にとまとめられていない。MSKの詩節と関連する内容の箇所のみが独訳された。それは次の箇所である(以下、ゴチックの数字はMSKの詩節の番号を示し、コロン(:)の記号を隔ててその次に続く数字・英字はその詩節への注にある立世論の独訳された箇所(大正蔵第32巻)を示す)—— MSK 2.1.1: 立世論 223c1-14; 2.1.3: 223c14-16; 2.1.4: 223c16-19; 2.1.5: 223c25-224a1; 2.1.6: 223c19-25, 224a1-3; 2.1.8: 224a3-c3; 2.2.1: 224c3-13, 225a5-20; 2.2.4: 225a20-22; 2.2.5: 225a22-25, 224c13-16; 2.2.7: 224c16-23; 2.2.8: 224c23-225a5; 2.2.10: 225a28-b14; 2.2.12: 225a25-28, 179c28-180a6; 2.2.13: 225b14-16; 2.2.14: 225b16-22; 2.3.6: 182c28-183a5; 2.4.1: 225b22-c8; 2.4.3: 225c8-15; 3.1.1: 225c15-19; 3.1.2: 225c19-27; 3.1.3: 225c27-226a4; 3.1.4: 226a4-6; 4.2.17: 215b21-24; 4.3.4: 215b25-27; 4.3.7: 219c5-7; 4.3.8: 215c18-28; 4.3.9: 215c18-216a7; 4.3.11: 21614-16; 4.3.13: 217c7-13; 4.3.16: 217c19-21; 4.3.17: 218a26-28; 4.3.18: 217b19-21; 4.3.20: 217c16-19; 4.3.22: 216b12-16, 218b4-8, 220a29-b4; 4.4.1: 216b17-27, 218b8-18, 220b4-14; 4.4.4: 216b27-217a19, 218c4-

219a10, 220b15-221a6; 4.4.5: 217a19-21, 219a10-12, 221a7-9; 4.4.7: 217a22-24, 219a13-16, 221a10-12; 4.4.11: 217a21-22, 219a12-13, 221a9-10; 4.4.12: 217a28-29, 219a19-20, 221a15-16; 4.4.13: 217a29-b3, 219a20-23, 221a16-20; 5.1.5: 222b6-19; 5.1.8: 222a17-b6; 5.1.13: 222c16-19; 5.1.14: 222c20-27, 223b23-24; 5.2.1: 222c29-223a3; 5.2.2: 223a6-9; 5.2.3: 223a11-13; 5.2.4: 223a15-19; 5.2.5: 223a20-b1; 5.2.7: 223a3-6; 5.2.9: 223a29-b1; 5.2.16: 223b2-7; 5.2.17: 223b8-28; 5.3.4: 223b11-14; 5.3.5: 223b14-18; 5.3.10: 223b22-27; 6.1.7: 221b4-6; 6.2.1: 198b18-20.

- 58) 立世論に従い、Loka-p のテキストを「悪徳が生じた」(doso uppanno) ではなく、「彼は誕生した」(*ca so uppanno) と訂正して読む。
- 59) この大梵天の宮殿を満たした、大梵天と共に棲む神々こそ、文献Xで『梵天の近侍である神々』(tshangs pa'i 'khor gyi lha) と呼ばれる、ブラフマ・パーリサッジャの神々(梵眷天、梵衆天)であると思われる。
- 60) 原文は、「梵天たちのその宮殿 (tāni ... brahmānaṃ vimānāni)」とのみあるが、前後の文脈から考えて、この梵天たちはブラフマ・カーイカの神々を意味すると思われる。
- 61) この文は、本来の形としては「さてこのことは常法であるが、世界が形成される時、物質的存在(色蘊)である四元素[の結合]より、ブラフマ・プローヒタの神々(梵輔天)の諸住処、諸宮殿が出現する」という文であったのであろうが、パーリ語版の編集者により、ブラフマ・カーイカの神々とブラフマ・パーリサッジャの神々の名前が、余計に付加されたときみなしう。前後の文脈から考えて、ここにはそれらの二つの神々の名がない方がよい。ブラフマ・カーイカの神々の成立はこの文の直前の文で述べられているときみなしうるので、この文ではその名は削ってよい。またブラフマ・カーイカとブラフマ・プローヒタの神々の名の間に挿まれてブラフマ・パーリサッジャの名が Loka-p のこの文のこの箇所にあることは、立世論や MSK の教理を考えると、他部派の伝承の contamination の結果としか思えない。立世論の犢子正量部の世界観ではブラフマ・パーリサッジャの神々は梵天と共住するので、独立に一つの世界を作る必要がない。ブラフマ・パーリサッジャの名はこの文から削るべきである。ビルマで Loka-p が原本からパーリ語化される時に、テキストの省略化と同時に被った内容的な「パーリ上座部化」の結果として、犢子正量部の宇宙論を知らない翻訳者により、ブラフマ・パーリサッジャの名が付加された可能性が高い。Loka-p の別の箇所 (I, p. 64) でも、これと同様の意図に基づく改変がなされている。
- 62) 色界の神々の宮殿は白浄であるが、欲界の神々の宮殿は金製・銀製・瑠璃製・水晶製である。この点で明確に区別がなされる。色界には金銀宝石がないという考え方が正量部独自のものかどうかは不明である。
- 63) 正量部系の伝承である Loka-p と立世論(数量品第七)が挙げる、ユガンダラ山を第1とし、ニミンダラ山を第7とする七山のすべての順序は、有部(俱舍論世間品第48~49頌)が伝持する七山の順序、すなわち内から外へ(1) yugandhara, (2) iṣādhara, (3) khadiraka, (4) sudarśana, (5) aśvakarṇa, (6) vinataka, (7) nimindhara の順序と一致する。七山の名称の伝承に関して正量部と有部の間には借用関係があるのであろう。と

ころが大衆部説出世部の Mahāvastu や、法蔵部の伝承である世記経、起世経等が挙げる七山の順序はそれらと全然異なる。Mahāvastu の伝承では外から内に向かって (7)、(1)、(2)、(3)、(5)、(6)、(4) の順番で列挙する (ed. SENART, II, 300)。世記経 (115c-116a, 139a-b) では七山は内から外に向かって (3)、(2)、(1)、(4)、(5)、(7)、(6) と列挙する。パーリ・ジャータカ541話 (Jātaka, VI, 125) の韻文では外から内に向かって (4)、(3)、(2)、(1)、(7)、(6)、(5) と列挙する。これらの伝承は、有部や正量部とは無関係に出来たことがわかる。しかし同じパーリ上座部の伝承でも、アッタサーリニーや清浄道論等の中の断片的宇宙論のように、前後の文から明らかに正量部宇宙論からの影響を指摘できる記事の中では、内から外へ (1)、(2)、(3)、(4)、(7)、(6)、(5) という、正量部伝承にかなり似た七山の順序を示す。ネーミンダラ山 (つまりニミンダラ山) の位置を第7ではなく第5とする点だけが違う。翻訳・研究として、KIRFEL (1920), S. 186 や、及川・村上 (1985-1989) 第3巻、260頁や、佐々木現順 (1960)、506頁や、浪花宣明 (1998)、522頁や、『南伝大蔵経』62巻406頁を参照。**【部派的相違点17】**

- 64) このテキストが出来た当時は、まだ水輪や風輪という言葉が無かったらしい。
- 65) 有部の意見では、風輪と水輪と地輪の直径は別々だが、正量部 (Loka-p と立世論) の意見では、それらの直径はどれも同じと見ており、風輪と水輪と地輪の直径がどれも 1203450である。OKANO (1998a), S. 163, Abb. 1 の図を参照。この点でパーリ上座部註釈文献の意見は、正量部の意見と一致する。浪花 (1998)、501頁参照。**【部派的相違点18】**
- 66) 校訂者 E. DENIS は写本の読み ratipathavī を、rasapathavī と訂正しているが、rasa- が正しい訂正かどうかはわからない。もし DENIS の提案のように読めば、この語をテキストのこの後に出てくる神話的な食物の名と同一視することになる。すると海の水が引いた後に大地の表面に出来た神話的食物がラサなのではなく、大地そのものがラサであることになってしまう。むしろ大地の同義語としての rasā (女性名詞) がここで意味されているのではないか。rasā pathavī と読むのではないか。
- 67) 四つの大陸の形を風の動きが造ったことを説く。この Loka-p の説明によれば東ヴィデーハ洲は円形、西ゴーヤーナ洲は半円 (半月) 形、北クル洲は正方形、ジャンプ洲は車形 (台形、半琵琶形) となる。この円形と半円形の大陸の東西の位置が、有部伝承では逆である。有部伝承 (俱舍論世間品54~55頌) では東ヴィデーハ洲が半円形、西ゴーターニーヤ洲が円形となる。また、東ヴィデーハ洲と西ゴーヤーナ洲の大陸の形が立世論と Loka-p で異なることについて、注意する必要がある。立世論 (225a26-27) では「有餘風有り、旋圓して而も西瞿耶尼及び東弗婆提を起成す」と説いており、両方の大陸において風は同じ様に円形を造るために丸く旋回したことになる。また立世論の別の箇所 (179c27-180a6) にも西瞿耶尼の地形を「團圓」、また東弗毘提の地形を「團圓、猶如満月」と説くので、両方の大陸とも「團圓」の形であることになる。その箇所でも両大陸はどちらも直径が2333由旬と三分の一、周囲が7000由旬と説かれているから、大きさが全く同じ円形なのである。片方が半月形で他方が円形という伝承は立世論には無いことがわかる。この立世論の伝承に従って作成した正量部の世界図は OKANO (1998), S. 175, Abb. 3 の図にあるような姿となる。このように立世論と Loka-p の記述が異なる場合は、基本的に立世論の伝承を信頼すべきであり、Loka-p ではパーリ語化の時に非正量部の編集者の手で正量部の伝承が故意に歪められ、他部派の伝承との contamination が起こった可能性が考えられ

る。Loka-p のこの箇所 (L19) では、有部の伝承を中途半端に知っている Loka-p の編集者が、文をおかしな具合に変えてしまったのではないかと私は推測する。なおパーリ上座部の註釈的伝統をまとめた14世紀初頭のサーラサンガハは第40章で宇宙論を扱っているが、そこに説かれる四大陸の形状は、有部の意見と同一であることが確認できる。浪花 (1998)、531頁の和訳を参照。ただしパーリ上座部の伝承が、東と西の大陸の形が違うにもかかわらず、その二つの大陸の周囲はどちらも同じ7000由旬としているのは奇妙であり、その奇妙さの原因は正量部の伝承する数字をそのまま借用したためと思われる。なお四大陸の形状について、所属部派不明の増一阿含 (T II, 590b5-7) においても、西ゴダーニーヤ洲は半月の形、東ヴィデーハ洲は正方形、北クル洲は満月のような円形、という全く独自の部派伝承を確認することが出来るので、決して有部の伝承ばかりを部派仏教の支配的な説とみなすことは出来ないことがわかる。**【部派的相違点19】**

- 68) インド仏教宇宙論の、地形はみな風が作りあげたという考え方は、山の形のような、明らかに水の侵食によって出来たものにまで及ぶ。
- 69) 原文は *yattha samam pariggahitvā ekato osakkanti tattha pabbatakucchi honti* で、閉じ込められた風が一方から出てゆく時、空洞 (*kucchi*) が出来る、と解釈するのか。しかし立世論の相当する文は「若し風の相撃ちて深く下底に入り復更に出でざれば山裏は則ち空なり」(225b3-4) であり、風が閉じ込められた時に空洞が出来るとする。
- 70) 立世論の相当する文は：「若し風の起こる時、相撃ちて深く入り還復更出ずれば、成ずる所の山勢は巖有り洞有り」(225b2-3)。
- 71) ここでも「半円形である」という表現は、「円形である」の誤りであろう。写本2本の読みは *aḍḍhavaḍḍhayi* で、校訂者はそれを無理やり *aḍḍhavaṭṭa pi* と訂正して読んだが、その結果、理論的に理解できない文にしてしまった。周囲3610350とは、チャクラヴァーラ山の円周を意味する。チャクラヴァーラ山の直径は地輪の直径と同じであるが、地輪の直径は1203450で、これに3をかけると円周になる。有部の見解では、地輪と水輪と風輪の直径は異なるが、正量部の見解では、それらの直径はすべて同じで1203450である。**【部派的相違点20】**
- 72) このL23の文の次に、「その時三十三天・四大王天・ヤーマ天の領域の神々が生じる」という文が来るが、その文以後 (L1~93) は、哲学年報63輯 (2004) の拙稿ですでに和訳を発表した。

参照文献

- 小野玄妙 (1933)：『佛教神話』(佛教思想大系第14巻)、大東出版社。
- 山口益・舟橋一哉 (1955)：『俱舎論の原典解明 世間品』、法蔵館。
- 佐々木現順 (1960)：『仏教心理学の研究 一アッタサーリニーの研究一』、日本学術振興会。
- 戸田忠・ウ=ウエーヅラ (1980)：『アビダンマッタサンガハ 南方仏教哲学教義概説』、アビダンマッタサンガハ刊行会。
- 及川真介・村上真実 (1985-1989)：『仏のことば註 パラマッタジョーティカー』、1~4巻、春秋社。

- 並川孝儀 (1992b): 「正量部の不動業説」、『佛教大学文学部論集』、第77、25-40頁。
- 梶山雄一 (1997): 「瑜伽師地論の宇宙論 (試訳)」、『仏教大学総合研究所紀要』4、5-16頁。
- 浪花宣明 (1998): 『サーラサンガハの研究』、平楽寺書店。
- 岡野潔 (1998b): 「インド正量部のコスモロジー文献、立世阿毘曇論」、『中央学術研究所紀要』第27号、55-91頁。
- 福田琢 (1999): 「加藤清遺稿 藏文和訳『世間施設』(2)」、『同朋仏教』第35号、27-43頁。
- 福田琢 (2000): 「加藤清遺稿 藏文和訳『世間施設』(3)」、『同朋仏教』第36号、19-56頁。
- 福田琢 (2001): 「加藤清遺稿 藏文和訳『世間施設』(4)」、『同朋大学論叢』第84号、45-68頁。
- 引田弘道・松村巧他五名訳 (2005): 『現代語訳「阿含經典」長阿含經』、第6巻 (世記經)、平河出版社。
- Willibald KIRFEL (1920): *Die Kosmographie der Inder nach den Quellen dargestellt*, Bonn.
- Genjun H. SASAKI (1992): *Sārasaṅgaha*, PTS, Oxford.
- K. OKANO (1998a): *Sarvarakṣitas Mahāsaṃvartanikathā. Ein Sanskrit-Kāvya über die Kosmologie der Sāṃmitīya-Schule des Hinayāna-Buddhismus*, Tohoku-Indo-Tibetto-Kenkyūsho-Kankokai, Monograph Series I, Sendai.
- YASHPAL (1999): *A Cultural Study of Early Pāli Tipiṭakas*, 2 volumes, Delhi.
- Bhikkhu BODHI & Mahāthera NĀRADA (2000): *A Comprehensive Manual of Abhidhamma*, BPS Pariyatti Editions, Seattle.